特集1
三重の若者

立川　陽仁

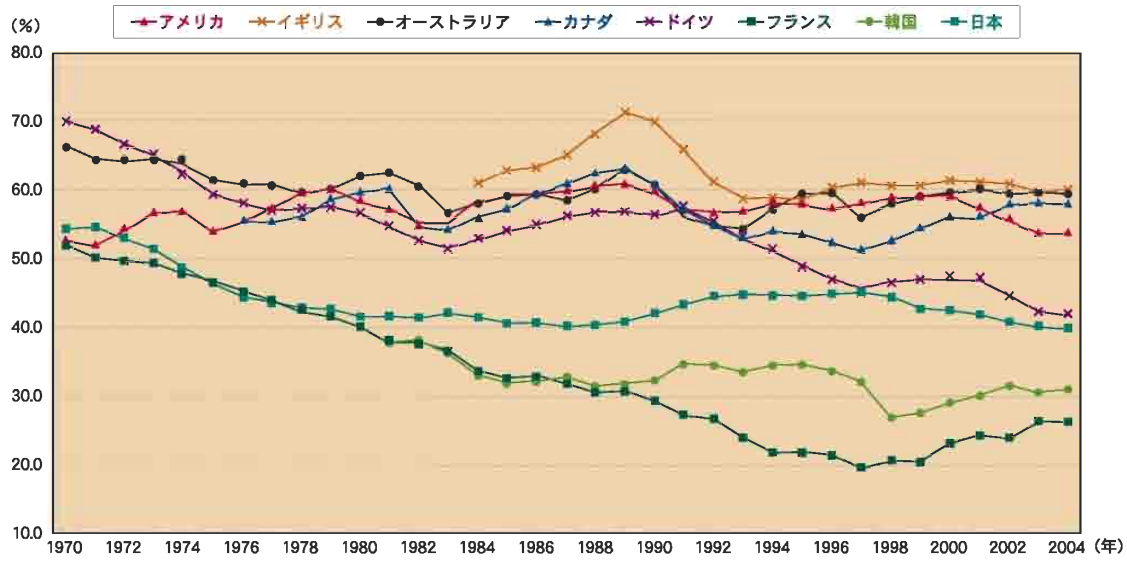
パーティ、そして「働かないこと」の美徳

「ニート」という語の祖国であるイギリスでこの語がどういう意味をもっていようが、また日本の各省庁がいかにこの語を定義しようが、日本での「ニート」の意味はいまや一人歩きしている。

日本のメディアはニートについて、「親のすねかじり」、「ひきこもり」、「無気力」、「社交性のなさ」などのイメージを断続的に流しつづけ、われわれはそのイメージを無造作につむいで意味をつくってきた。私の知人に「ニートってどんな人だと思う？」と聞いてみても、やはり「甘ったれ」で「無気力」で「社交性のない」人物の像があがった（ちなみにその知人によれば、芸人をめざしつつ酒屋でアルバイトをする若者は、ニートではなく「フリーター」あるいは「芸人の卵」だそうだ）。この私の知人と同様に、われわれは日本のニートをまずもって（定職かアルバイトかを問わず）経済的に自立する道を選ばずに親に依存しつづける無気力な若者とみなすだけでなく、「プータロー」、「フリーター」などの能天気さや明るさを欠くものというイメージでみてきた節がある。こうしたニート像は多くの場合マスメディアによって創られたものでしかなく、実際には少数派なのだろう。ただ、メディ

これまでC町を支えてきたサケ漁業の風景（著者撮影）

■若年就業率の推移



資料出所　OECD "Lobour Market Statistics-iND:CATORS"

アが描く極端なニートほどではなくても、ちょっとのことで仕事を休む若者への不平をいう大人の声も少なくないから、メディアのイメージをまったくの事実無根とみなすわけにもいかなそうだ。

さて、これらのニート像が実態を反映しているかどうかはさておき、こうした日本型のニートは明らかに日本社会固有のものである。ニートの生みの親であるイギリスはおろか、私が仕事柄しばしば訪れる北米各地でも、若年無業者の数はそれなりに多いものの、日本で問題にされるようなニートが生まれる素地そのものはうすい。

私の専門とする社会人類学では、「他人を理解することにより自分を理解する」ことがめざされてきた。本特集に一筆よせるにあたって、私はこの「他の理解により自の理解をめざす」という言葉にのっとり、まずは北米、とくにカナダのCという、三重と比較的社会・経済的環境がにている町の事情について述べたいと思う。

くり返すが、日本型のニートが国境を越えるということはそうそうないし、もちろんカナダでも生まれにくい。理由はいくつか考えられるが、そのなかにはこういったものがある。たとえばカナダやアメリカでは、一八歳を過ぎると若者は親元を離れ、友人らとアパートや借家をシェアするという風習がある。また、彼らは（われわれ日本人以上に）パーティと日常的に接していることもその理由の一つだ。

若者の一人暮らしの風習が親からの経済的自立をうながし、その結果ニート化を未然に防ぐだろうことは容易に想像できる。先にあげたC町であれ、バンクーバーやその他の町であれ、私がであった若者たちは親に金銭的な面で迷惑をかけないことをつねに心がけていた。大学に進もうが仕事に就こうが、彼らはなにかしらの方法で金を稼ぎ、家賃と光熱費を支払うようになるのである。大学生のなかには、学費が支払えなくなった場合は学費を稼ぐために休学することも辞さない人が多くいる。もっとも、親にさえ面倒かけなければいいと思うのか、なかには友人から金を借りて返さないとか、他人から盗みを働くといった事態も日本よりは多くなる。ニート化を未然に防止するこの風習の代償はけっして小さくない。

さて、もう一つのパーティについて。カナダ人やアメリカ人がおこなうパーティは、いまや映画などで有名な光景になっている。もっとも、私がここでいうのはゴージャスなバンケット・サービス付のパーティというよりはむしろ、われわれ日本人の晩酌や飲み会に近い家庭でのパーティのほうである。結婚して子どもがいる家族ではこうしたパーティの数は次第に減ってくるものだが、親元を離れたばかりの若者は、解放感などもつきあって頻繁にパーティを開くものである。カナダのC町で私と仲のよかった若者たちは、一週間の住みこみ労働から家に戻ってくると、ほぼ毎週のようにパーティを開いていた。

当然ながら、パーティと日常的に接することを通じて、彼らは社交性をつちかうことができる。もっとも、「パーティ人間」と呼ばれるような人たちは元来明るく話し好きな人だろうから、ひきこもりとは無縁なのだが。むしろ私が強調したいのは、「じつはパーティは苦手」と思っている少数派（?）とパーティの関係なのだ。

じつをいうと、私自身、C町に住んでいたときには「今日はパーティだ」と聞くと憂鬱になる一人だった。しかし私には、パーティへの出席を拒みつづけることなどできなかった。当たり前だが、パーティとは単なる「どんちゃん騒ぎ」や「飲み食い」の場ではなく、他人との関係を確認する場でもある。だからパーティにでないと、「ああ、あの人はパーティが好きじゃないんだ」と思われるだけで済むとはかぎらない。「（出席している）俺たちが嫌いなんだ」と受けとられかねないのである。そう思われないためにも、いくらパーティが苦手でもとりあえずでておくことは必要になる。

さて、いざパーティにでてみると、（少なくとも私は）一つ大きな問題に直面する。パーティにはふつう知人だけでなくその知人も来るもので、それ故に「みず知らずの人」がたくさんいる。これらみず知らずの人たちと当たりさわりのない会話をしなければならないのが、私のパーティ嫌いの真の理由だった。みず知らずの人たちと私、しかも日本人である私のあいだに、いかなる共通のトピックがあるだろうか！それでも私は、彼らと当たりさわりのない、いわば無機質な会話をしようともがくのだが、結局「ハイ、アイム〇〇」という形で手をさしだし、無機質な話題を提供してくれるのは、みず知らずのカナダ人だった。そのときの私はというと、ふられた話題になんとか乗じつつ、「どうでもいい話題を即座に提供できる」彼らの能力に感心するばかりだった。

C町周辺に導入された養殖場とそこで働く若者

■若年無業者の推移

(%)

		1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003
アメリカ	15～19歳	7.8	7.3	7.4	7.0	7.5	7.0	…
	20～24歳	17.8	14.4	15.1	14.4	15.6	16.5	…
	25～29歳	17.0	15.4	15.7	15.8	17.7	17.4	…
イギリス	15～19歳	…	…	…	8.0	8.2	8.6	9.4
	20～24歳	…	…	…	15.4	14.8	15.3	15.3
	25～29歳	…	…	…	16.3	16.0	16.0	16.3
オーストラリア	15～19歳	9.9	8.8	7.4	6.8	7.6	7.0	6.8
	20～24歳	16.9	16.0	14.5	13.3	13.9	13.2	13.3
	25～29歳	21.5	19.2	18.5	19.0	17.2	17.8	17.6
カナダ	15～19歳	7.3	7.4	7.1	7.0	6.1	6.5	6.7
	20～24歳	17.2	16.5	14.6	14.2	14.4	14.0	13.2
	25～29歳	21.1	18.3	17.3	16.3	15.7	16.7	15.6
ドイツ	15～19歳	…	3.4	4.5	5.7	5.1	4.7	4.7
	20～24歳	…	15.0	16.7	16.9	16.4	15.9	15.6
	25～29歳	…	17.7	18.2	17.5	18.0	17.4	18.4
フランス	15～19歳	2.5	3.1	3.3	3.3	3.4	3.4	14.0
	20～24歳	17.5	16.5	17.5	14.1	13.4	14.4	15.5
	25～29歳	21.0	22.1	21.4	18.6	18.3	18.2	18.8

資料出所　OECD "Education at a Glance 2005"

しかしこの苦痛に満ちたパーティをくり返すことによって、多少は私もパーティ人間らしくなったかもしれないし、同時に社交的になれたかもしれない。酒を飲み、本当の自分でない「嘘の」自分をつくり、愛想よくどうでもいい無機質な話題をふりまく。これこそパーティで求められている能力であり、パーティでの「社交性」だ。このようないい回しをすると、私がカナダ人のパーティを皮肉を込めてみていると思われるだろうが（その通りだ！）、同時に賞賛もしている。よく考えてみると、日本でも、社交的な人物とはじつはこんな人なのかもしれないし、企業が欲しがっているという「ふつうの人材」もこんな社交性をもつ人なのかもしれないのだ。

さて、ここで社会（ニートでない人びと）に目を転じてみたい。ニートが問題になるのはニートを問題にする社会（ニートではない人）がいるからだ。同じ考えでいくと、北米で（日本型の）ニートが生まれにくいのは、定職をもたずなにもしない若者に対する社会の目が、日本よりは寛大だからなのだといえるかもしれない。

かつて私は、北海道の石狩と網走の漁師さんに話をうかがったことがある。彼らは大漁だろうがなんだろうが、季節ごとにとる対象をかえて年中休みなく魚をとりつづけるのだそうだ。対してカナダの漁師、とくにC町の漁師さんはというと、ニシンのシーズンである三月の二週間およびサケのシーズンである夏の三ヶ月以外は、働かずに家の裏庭で犬とあそぶ生活を送る方が多数いた。もっともこれは、漁の景気のよさによるところが大きく、最近では漁業不振のせいでそういった生活もむずかしくなっている（それでも現にC町にはまだオフシーズンに犬とあそべる漁師さんがいる）。しかし私が問題にしたいのは、漁の景気の話ではない。北海道の漁師さんなら、大漁で景気がいいとしても働く手を休めることはしないだろうが、カナダの漁師さんなら仕事をしないだろうということこそ問題にしたいのだ。C町の漁師さんは、経済的に余裕があるのならあえてシーズン中以外にほかの仕事をする必要を感じないし、社会も彼らの働かないことを、とがめはしないのである。

C町では、かつて漁業と林業が男のおもな働き口だったが、これらの産業が衰退したせいで、男たちは地元にとどまって定職を得ることができなくなった。そこで彼らは、アルバータ州の石油パイプライン建設のために短期の出稼ぎにでたりするようになったのだが、まとまった金が入ると、地元に帰って金がなくなるまで何ヶ月もまた仕事をしないことが多い。対して社会が彼らをとがめたりすることも少ない。もっとも、近年この地域には大型の養殖産業が導入された結果、多くの若者が雇用と高い収入を得られるようになったので、若者の就職の見通しは明るくなっているが。

働かない人に対する社会のこうした寛容さには無論、けっして良好とはいえないカナダの景気が関係ある。カナダの失業率はじつに一〇パーセントをこえるが、C町のように第一次産業で切り盛りしていた地方の町になると、大都市よりことが深刻になる（そしてカナダの半分以上は、そうした地方の町や村だ）。景気が悪いと、定職がないということは仕方がないとみなされる。それは定職を持たない本人のせいではなく、景気が悪い社会のせいだという説明が用意されるのだ。「ニート」という言葉の祖国であるイギリスでもその後「ニート問題」が深刻化しなかった要因は、部分的にはここにあるのかもしれない。

しかし理由はそれだけではない。「お金のことで他人に迷惑をかけるようにさえならなければ、あえて仕事をする必要がない」という考えそのものが、元来われわれ日本人より強いのだと思う。われわれ日本人は、仕事（とくに定職）というものをある意味神格化し、それを単なる「生活するために金を稼ぐ手段」以上のなにか崇高な行為とみなしている。一昔前であれば、仕事での実績はその人の人格に反映されたし、また企業が仕事時間以外の生活に口をだすのもわりと当然だった。おそらく日本社会によるニート問題は、この「仕事崇拝」から生まれているのではないか。それに対して北米社会では、少なくとも労働者階層の人たちは、仕事を自己達成やその他の崇高な行為とは考えずに「生活するため金を稼ぐ手段」と捉え、その代わりに遊びや家族との時間などに崇高な価値を与えている。他人に迷惑をかけずに生活できるのであれば、仕事をしないことはある意味ではとがめられる行為なのではなく、崇高な行為なのだ。

（たちかわ　あきひと）
人文学部講師　社会人類学